



バスケットボールプラザ

Basketball Plaza

No:15

2001年 7 月

日本バスケットボール振興会

New Driving Standard

For more Comfort For more Economy For more Safety

シートベルトをしめ、スピードを抑えた安全運転を、点検・整備をしっかりとしましょう。

ISUZU

2001 MT革命

時代はデュアルモードへ



写真は撮影用特別仕様車です。



日本初 デュアルモードMT採用

Dualmode MT

クラッチペダルを操作せずに発進・変速・停車ができる「クラッチフリーモード」と、従来の「マニュアルモード」の2つのモードが選べる、ELF独自のトランスミッションです。

※小型トラッククラス

ELF独自のデュアルモードMT採用。 この経済性が小型トラックの新しい基準です。

21世紀を走るために、そのトラックは生まれました。新しい時代の指標となる革新的な快適性と経済性を目指し、そのトラックは開発されました。マニュアルトランスミッションの常識を打ち破るデュアルモードMTを採用した、新しいELFの登場です。

軽快な運転操作性やハイレベルの安全性を実現するとともに、クラッチ摩耗の低減をはじめとした抜群のコストメリットを確保。

環境との調和にも配慮し、経営者の方にもドライバーの方にも、さまざまなメリットをお約束します。

日本を代表する小型トラックとしての信頼と実績の歴史に、いま新たに刻まれる「革命」の1ページ...21世紀も小型トラックの歴史はELFが切り拓きます。

コスト削減に 効く!

クラッチ交換寿命を延長 すぐれた燃費を実現

ブレーキパッドや
ライニングの寿命を向上

経営効率化に 効く!

ドライバーの営業品質を向上
労働環境を向上

環境に 配慮!

アイドリング・ストップ装置
を標準装備

効果は使用条件により異なります。

ISUZU 新型 ELF 登場

●ISUZU商用車に関するお問い合わせは最寄りの販売会社、またはいすゞ自動車株式会社 お客様相談センターへ。フリーダイヤル0120-119-113 ダイヤルイン03-5471-1188
受付時間:月曜～金曜(除く所定の休日)9:00～17:00 ●インターネットからISUZU商用車のお役立ち情報が取り出せます。 <http://www.isuzu.co.jp/cv>

目 次

○ 平成13年度総会報告概要	1
○ 特集 「協会新男女強化部長に伺う」	広報部会 9
○ N B A放送を解説して	河内 敏光 16
○ バスケットボール用語（N B A関係）の手引き	18
○ 観戦記	
J B Lファイナル第2戦	小澤 正博 21
W J B Lファイナル第3戦	壁谷 道明 22
ミニバス全国大会	小笠原義昭 23
東アジア競技大会	早川 忠雄 24
○ 風神雷神	
日本のバスケットに期待する	中野 富郎 25
○ わが軌跡	
わがバスケット史	日高 明 26
私とバスケットボール	渡辺 勝己 27
○ 会員だより	
歩んだ道	松木 則好 28
ミニバススポーツ少年団を指導して	渡辺 恵子 30
○ 常任理事会報告	31
○ 各団体スケジュール	33
○ 事務局だより	37

特 集

—— 協会新男女強化部長に伺う ——

ご承知のように、先頃（財）日本バスケットボール協会新役員の陣容も決定され、既に活動中ですが、中でも注目される強化の部門については、新たに男子強化部長として沼田宏文さん、女子強化部長として佐治恒孝さんが、それぞれ就任されました。

そこで当振興会としては、新任のお二方から強化のお仕事やご抱負などについて是非伺いたいと考え、日本協会（石川専務理事）にお願いしましたところ、幸いにご快諾を得られましたので、ご両氏から以下のような貴重なお話を拝聴できました。

協会側のご好意に対し深謝申し上げるとともに、当会のため大変ご多忙な時間を割いてわざわざ事務所までお運び下さったお二方に改めて心からお礼申し上げます。

因みに、ご両氏は、振興会大塚周一副会長（広報担当）が、かつて（昭和56～59年）2期にわたって協会理事技術強化部長を務めた時期に、沼田さんは全日本代表選手の一員として、また佐治さんは全日本女子チームの総括コーチとして、それぞれ大活躍をしておられたという、ご縁のある方々で、その意味でも久々の懐かしい対面となったことでした。

男子強化部長 沼田 宏文氏

1951年（昭和26年）生まれ兵庫県出身、同志社大学卒業後、松下電器チームおよび全日本ナショナルチームでセンターとして活躍。1972年ミュンヘン、1976年モントリオールオリンピックを始め多くの国際大会に出場。現在、松下電器企業スポーツグループ部長、バスケットボール部々長。



—— 本日はお忙しいところお越しいただき誠に有難うございます。振興会は、主に日本協会始め傘下各組織の関係者や関係企業のOB、OGの人達が集まっている会です。私達の努力不足もあって、まだ一般的に充分承知されていない面もありますが、会員同志の親睦のほか、少しでも日本バスケットボール界のため、お役に立てるかと思われるような活動を地道に行なっている会で、会費制で運営し一般の方も入会されています。

—— このたび協会役員として男子強化部長という重責を担われましたが、まず担当される仕事の内容と目標などをお聞かせ下さい。

「今年度の強化方針と計画は昨年度からの路線の踏襲が中心となりますが、“国際舞台で注目される日本”を目指しています。なかなかオリンピックに出場できない日本は、世界的にも出遅れ、レベル的にも最近では距離をあげられている現状です。

ここでもう一度皆で考え、知恵を出し合い、中長期計画のもとにやっていかねばならないと思います。

2006年にさいたま市で世界選手権大会が開催されますが、この大会は日本が大きく世界に飛躍できるか否かを試す大きなポイントになると思います。今から2006年にねらいを合わせて強化の計画を練りますが、当面世界のベストエイトに入ることを最大の目標として、具体案を作ります。」

—— 2004年アテネオリンピックについてはいかがでしょうか？

「2004年の予選が2003年のアジア選手権になりますが、現在の大学生とJBLの1～2年生が強化の対象となりますし、更に2008年に向かつては現在の中高校生までが強化のターゲットとなりますので、これらの対象者をいかに育てるかがポイントです。

結局、2004年に向けてと2006年に向けてとの、二本立ての強化ということです。

そして、「日本が継続的にオリンピックと世界選手権に出場できること」を大きな目標として計画を進めます。」

—— 具体的にはどのような計画でしょうか？

「協会としても、尾崎会長が強化本部長、石川専務理事が強化副本部長に就任し、男女合わせた「強化本部会議」が発足しました。これには男女ナショナルチームのヘッドコーチはもとより、JBLや大学の指導者、各地区高校の強化メンバーの方なども入って強化方針を検討しますが、いわば全日本的な活動に全員で参加していただく形です。強化方針などについては、ナショナルチーム（A）が横断的に統括し、下は中学からナショナルチームまで一貫した方針を徹底していきます。従来は大学、高校、中学とそれぞれの分野に任せた形となっていたのですが、一貫した強化活動の流れのなかで切磋琢磨していくことがねらいです。ナショナルチームランクをA B C Dの4ランクに分け、それぞれに強化スタッフを置きますが、強化本部会議にはA B C Dのスタッフ全員が参加して意志統一をし、バスケットの基本動作や約束事、体力面やファンダメンタル的なことまで共通した認識のもとに強化を進めていく方針です。

A B C Dの振り分けとしては、Aはナショナルチーム、Bはユニバーチーム、Cは高校生、Dは中学生としますが、Bの選手がAに入ることも充分あります。」

—— 一貫性のある強化方針は大きな前進と思われますが、技術的な面での問題点は？

「世界に通用させるためには、なんといってもセンターを育てることが急務です。更に大型フォワードや大型ガードも必要です。これについては中学、高校のときから教えていく必要があり、例えば自分のチームにいるときはセンターでも、全日本に入ったら大型ガードとして活躍できるように仕向け、育てることが大切で、その結果としてオールラウンドなプレイが可能になると思います。」

—— 現在ナショナルチームの強化はいかがですか？

「昔は体力面、基本動作、ファンダメンタルなども鍛えられたものですが、現在は時間がないためプラットホーム（土台）を作るなどということまではできません。したがって、ナショナルチームに入る前に、筋力トレーニングを始めとする最低限必要なことを、日常の練習により、完成させていく方向で育成しなければなりません。今までこういったことも各層別に任せっぱなしでしたが、これからは方針を一本化し、若いときから一貫性をもった練習をすればレベルは上がると思います。

世界的に見ると日本の選手はやはり小型ですので、技術的にも工夫が必要です。例えばフックショットがありますが、ナショナルチームに入ってから教えても無理があります。中学生の時から教えれば、充分にこなせる技術だと思うのですが、教えないし教えられないのでやっていないようですし、こういう面でも共通認識は重要なことだと思います。」

—— 世界に通用する日本のバスケットとはどういうものでしょうか？

「日本はどうしても小さいので、スピードとシュート力を軸にした平面的なバスケットに加え、緻密なディフェンスができるチームを作り上げることが必要です。「国際的に通用するバスケット」を明確にして、共通的な技術をA B C D各分野で身につけながら、

積み重ねていけば、世界に通用するチームの実現は可能だと思います。」

—— 中国と韓国のバスケットを見てどう思いますか？

「東アジア大会で中国を見ましたが、ほぼナショナルチーム勢で高さもあってインサイドバスケットの技術も持っていると思います。韓国はスピードとシュートによる、いわばF1バスケットで、もっぱら相手をかく乱する戦法でしたが、技術的にもしっかりしています。両者に共通して言えることは、勝利に対する執念がすさまじいことです。」

—— 当面日本がアジアで勝つためにはどうしたらよいのでしょうか？

「東アジア大会を見た限りでは、まずディフェンスの強化が必要です。各ピリオドが始まって3分から5分位はきちっとディフェンスしていて、スコア的にも対等に勝負していると思いますが、その後がだめですね。ノーマークの時のシュート率も悪くなるし、まだまだ改善が必要です。」

幸い人材的には現在のメンバーを鍛えれば、対抗することは可能とみています。強化の流れを切らさないよう、皆で努力すれば何とかなる可能性をもっています。」

—— 何とかなる可能性があるということは頼もしいことですね、センター陣はいかがですか？

「JBLチームのセンターが殆ど外人選手なので、平素の試合にあまり出場できず、経験が不足するという影響はありますが、毎日練習で外人を相手にしているせいもあり、伸びてきています。ただ、センターとしての国際試合の経験が少ないという弱点もあります。」

日本リーグも含めてフックショットをこなす選手はいませんが、アメリカの選手でさえもやっているのもっと研究する必要があると思います。全日本女子のセンターである浜口選手は充分こなして成功していますし、国際的にどうしたら通用するのかを目の色変えて研鑽し、練習しないといけません。センターで青野という選手がいますが、素材としては充分なのですが、プレイの成長に時間がかかりすぎています。もっと厳しい環境で練習することが必要ではないでしょうか。」

—— 中国や韓国の選手はボールに対する執念という面や、ファンダメンタル面もしっかりしているように感じますが？

「そうですね、バスケットをやる環境も日本とは違うようですし、若いときから一貫した強化がされているようです。選手は特に試合になると、駆け引きというか勝つことにすべてを集中できる体制に仕上がっているようです。」

オーストラリアなどは高校の優秀な人材をピックアップして、合宿をしながら高校教育を行い、強化していく方法などがとられていますが、育成の一貫性が貫かれている良い例だと思います。」

—— JBLとの連携面はいかがでしょう？

「このたび蒔苗協会副会長をJBL会長にお迎えしたことで合わせ、部長会が協会に対し協力的ですので、良い関係ができてきています。私も部長会と協会の両方に足を入れていますので、お互いのコミュニケーションは図れると思っています。」

—— JBLの更なる活性化についてお考えがありますか？

「チームの休廃部が続いてきましたが、スーパーリーグという形には各社ともそれなりにメリットを見出しているようです。ただし、その意味ではやはり勝たないと問題ですが、最終的に勝つのは1チームだけなので大変です。活性化策としては、スポンサーを増やしていくことと、マスコミへの露出度を多くすることだと考えます。そのためにはスリリングなバスケットを展開できる選手、ヤングメンの田臥のようなスター選手が欲しいですし、

マスコミも、もう少しアマチュアスポーツに目を向けていただきたいと思います。これからのスポーツ界は、プロ化に進む種目とアマチュアに徹する種目と、二分化されていくのではないのでしょうか。その中でバスケットは、その面白さを原点から掘り起こしていけば、なんとかなると思います。

NBAの公式戦が日本で開催される場合、価格の高い席から先に売れるという現象をみると、選手のタレント性を含め、活性化のための出直しは可能だと考えます。」

——— 日本のバスケットがこれから目指す方向はなんでしょうか？

「先ほども言いましたが、日本は身長的に小さいので、平面バスケットを5人がそれぞれ早いスピードで繰り広げないと、観客に感動を与えられないと思います。単に勝つためのシステムバスケットではなく、例えばパス一つにも注目を集められるようなプレイが大切だと思います。どんな試合でもコート一杯に走り回って、早い展開のバスケットを繰り広げられれば、見ている方々にそれなりにアピールできるのではないのでしょうか。」

——— 会社の仕事と協会の役員ということで大変お忙しいと思いますが悩みなどは？

「会社の仕事は当然のことですが、最近チーム（松下電器）が弱く、あまり勝てないのが悩みです。プレスーパーリーグで最下位だったことが、一番のストレスになっています。

協会の方は、役員みんながボランティアとして、それなりに苦労しておられるようですが、やはり時間のやりくりが一番大変です。

お酒も、昔は結構飲んだものですが、最近はあまり飲まなくなりましたというか、ゆっくり飲む時間もないということでしょうね。」

——— これからの抱負をお聞かせ下さい。

「当面なんといってもアジアを制することです。世界のベストエイトになるには、どうしても中国を倒さなければだめで、そのためには中国にも遠征して、もっと中国を研究する必要があります。選手には、国際大会におけるファンダメンタル的なこと、つまりは代表選手としての苦しさや辛さ、また誇りなども更に植え付けたいし、ベテランのサポートも必要と思われます。吉田ヘッドコーチに対しては、全日本チームのモラルアップを期待したいし、また国際経験も更に積ませたいと思っています。」

——— 本日は大変お忙しいなか有難うございました。





女子強化部長 佐治 恒孝氏

1947年（昭和22年）生まれ神奈川県出身、東京学芸大学卒業後、都立八王子工業高校男子をかわきりに都立駒場高校などで高校女子バスケットを指導、東京学芸大学女子チームコーチ、日本航空女子チームコーチ、全日本女子チーム総括コーチなどを経て、現在都立玉川高校校長。

——— 本日はお忙しいところをお越しいただき誠に有難うございます。

（振興会についての紹介は前記沼田氏の場合と同様につき省略）

——— このたび協会役員として女子強化部長という大役を担われましたが、日常お忙しいのに大変なことと思いますが？

「私の場合は1994年まで女子ナショナルチームに関わってきておりましたが、その後7年間は協会というか、バスケットに直接的には携わっていなかったもので、現在改めて勉強しているところです。幸い全日本女子は北原氏が専任のヘッドコーチとして就任していますので、技術的な点などは任せていますが、強化の環境作りなどはやらなければならず、学校の仕事と両立させるのに苦労しています。」

——— 今年の女子アジア選手権大会は、日程と開催地が変更になったりして大変でしょうね？

「そうですね。当初マレーシアで開催される筈だったのが、10月4日からタイで開催されることに変更されたので、WJBLの日程にも影響しています。

女子の場合、アジアでは中国、韓国と並んで日本が三強の一角を占めていますので、不覚をとることのないよう、今から強化合宿や海外遠征などで強化を図っています。」

——— 男子の沼田強化部長からお聞きしました協会の「強化本部体制」は、女子についても同様ですか？

「同様です。特に女子の場合、強化の一貫性を図るとともに、国内のチーム（WJBLや大学、高校）の影響をあまり受けないよう、全日本のヘッドコーチを専任制にしている点が特徴です。全日本のヘッドコーチがどこかのチームのコーチだったりする場合、なにかと微妙な問題を生じたりもしますので、やはりナショナルチームには専任コーチ制度が必要で、今回は画期的だと思っています。国際経験豊かな北原コーチも、今後更にアジアにおける女子バスケットに精通する必要があるでしょうし、世界を見据えながらアジアを制するという視点に立って頑張ってもらいたいものです。また、強化本部長の尾崎会長や副本部長の石川専務理事は女子の技術畑出身ですので、大変心強く思っています。

ただ、財政的にまだまだ強化費用が充分ではないので、それぞれの企業や大学にお世話にならなければやっていけない面もあり、支援体制作りが課題です。」

——— 具体的に強化の方針というか、計画はどのようなものでしょうか？

「女子の場合は、ナショナルチームをABCの3段階に分け、Aはナショナルチーム、Bはユニバーチーム、Cはジュニアチームとなっています。男子と同様に強化本部会議には全部のスタッフが参加しますし、強化方針は強化部やナショナルチームのヘッドコーチが主体となって計画します。

現在、Cのジュニアチームが7月14日からチェコで開催されるジュニア世界選手権大会に出場するため、ヨーロッパに遠征しています。

強化の一貫性という意味合いから、下は中学からしっかり指導しないといけませんが、ご承知のように、中学界は指導者が少なく困っています。女子は高校を卒業するとすぐ

実業団に入る選手も多いので、それなりに小さいときから、きちんと段階に応じた指導をすることが必要だと思います。」

—— 2004年のオリンピック出場に向けてはいかがですか？

「まずアジアで勝つことが主眼となりますが、同時に世界に目を向けた強化も必要だと思っています。日本はチーム全体が小型ですので、身長差をカバーするためコート全体を使ったバスケットが要求されますし、スピードも必要です。更に3ポイントシュートの確率もあげなければなりません。その選手がシュートしたら必ず成功する（シュート確率100%）ぐらいの技術も、身につけなければなりません。アジアからオリンピックに出場できるチーム数が変動するので、アジアを制することは絶対条件ですし、また可能性も持っていると思います。世界的に見れば小型のチームですが、日本独自の創意工夫を引き出すために、選手個々が大型のチームに対抗することも体験していかないとできませんので、ヨーロッパ遠征などは良い経験になると思います。しかし、まだまだ予算が限られているのでやりくりが大変です。」

—— 海外遠征等をするためにはそれなりの強化費用が必要だと思いますが、現在の強化予算はいかがですか？

「前年度までの赤字を補填しながらやってきたようで、強化費としては確かに不足していますが、やむを得ないと思います。本年度から始まった“個人登録制度”によって、来年度からもう少し予算も増えると思いますが、これを単なる個人的な登録とのみ解するのではなく、登録した人達を協会の会員として扱う、つまりナショナルチームは会員も支援するというような方式、そういう考え方に立つことが良いと思います。ナショナルチームが海外に出ていくことに対し、“会員がその強化資金の一部を出資している”という意識のもとに強化を図る訳です。逆にナショナルチーム側は、“会員によって支援強化されている”という意識を持つことによって、結果を出さなくてはならないという責任感と勝利への意欲が更に強くなるはずです。」

そして会員（会費負担者）に対する還元の意味で、地域との交流やクリニックの開催、ナショナルチームの練習見学会などを実施し、その果てに“勝利”というお土産を贈るといような形になれば、ナショナルチームに対する関心も深まるし、選手もやる気になるという一石二鳥の効果を期待できるでしょう。」

会員の方々にしてみれば、ナショナルチームに対し自らの手で育成強化を手伝っていることに通じるし、資金の一部をも担っているのだという意識も是非もっていただきたいと思います。そうなれば強化としても、きちんとした強化方針を会員に説明する義務が生ずるでしょうし、またナショナルチームを身近に感じるようなコミュニケーションを図ることも当然必要となるでしょう。」

—— 個人登録制度というか会費問題もそうした観点から考えてみると判りやすいですね。

「大切なのは何事もきちんと説明して、納得していただけるよう努力し、実行することです。国際大会に際しても、単に日本のチームの勝ち星や結果だけではなく、そこに至るプロセスを理解していただけるような対応が必要です。ナショナルチームが海外に遠征する前に、会員との交流を図って選手たちを身近に感じてもらったり、強化費用の内訳を良く説明したりすれば、会員の方々に“ナショナルチームの支援をしているのだ”という実感も湧くし、バスケットに対する関心が高まり、選手たちもその気になって戦えると思います。」

—— 日本がアジアで常勝するための対策はどんなことですか？

「先ほども触れましたが、攻守にわたってコート全体を活用するバスケットの展開、日本にしかできない創意工夫によって、いかに身長差をカバーするかが大きなポイントとなるでしょうね。ガード陣やシューター陣は世界にひけをとらないでしょうが、やはりセンターというか大型の選手を育成することが必要です。日本全体を見ると大型の人材は結構いるのに、なかなかバスケットボール選手として育成できません。190センチ台のセンターがいれば、アジアでの地位も全然違うと思われまので、大型の人材を中学生の頃から徹底して指導することが大事です。ただ、中学生は義務教育の範囲内では問題があるし、また勝利への過度のこだわり（中学校大会の優勝チームの選手がナショナルチームに繋がっていない）なども課題となりますが、要はナショナルチームとの接触などを通じて、もっと夢の持てる強化策を期したいと思っています。

それともうひとつは、ピリオド制におけるゲームの勝ち方、特に、第4ピリオドの戦術戦略面で、コーチと選手が、観客をも取りこみ一体化できるものを持つことも重要でしょうね。」

—— 中国や韓国の子を見てどう思われますか？

「5月に開催された東アジア競技大会で、韓国に勝っていた試合を残り7秒で逆転されて負けましたが、中国や韓国のチームにはいつもベテランのゲームメーカーがいて、いざという時に力を発揮するようです。勝利に対する意欲というか、執念のようなものを感じます。昨今の日本の選手は、昔と比較して柔軟性ではやや劣るかも知れませんが、筋力は強くなっていてパワフルだと思います。ただ精神面では、コート上での自己主張が弱く、アピールが下手なのかそれぞれの“個性”というものがコート上に見えてこないように思われます。結局自分の所属チームや経歴などの問題ではなく、“ナショナルチームにきて何ができるか？”なのですがね。例えば技術的には相手国と同程度としても、相手に圧力をかけられた場合、日本はお互いにもたれ合うというか、他の誰かを頼りにしてしまっていて、“何がなんでも私がやってやる”というような選手が育っていないですね。

とにかくアジアでは接戦となること必至ですから、要はそのときの“決め手”を持つことではないでしょうか。」

—— これからの日程はどのような予定でしょうか？

「当面の日程として、Aチームは10月にタイのバンコクで開催される、アジア選手権大会兼世界選手権予選に焦点を当て、B（ユニバー）チームは8月に北京で行なわれる、世界ユニバー大会、C（ジュニア）チームは7月にチェコで開かれる、世界ジュニアとなります。」

—— 学校では大変理解があって、素晴らしい校長先生と承りますが？

「そんなことはありませんが、今の時代は色々な方面に気を配らないといけません。私のいる学校にサッカーのナショナルチームに入っている生徒がいますが、海外遠征も多く、対応には何かと配慮しています。サッカー協会では高校生を遠征に出す場合、学校の授業に代わる教育なども行なっているようです。若年の頃から海外遠征をしたりして経験を積み重ねれば、世界的に通用する選手がでてくるものと思います。バスケットボールも是非そうありたいものだと願っています。」

—— 本日は大変お忙しいなか有難うございました。

[担当：広報部会]

NBA放送を解説して



河内 敏光

現在私は、NHK・BS放送のNBAゲーム解説をしています。

私を含め5～6人の解説者と、実況担当アナウンサーは4人位で分担して放送をしています。局側には解説者の経歴などを確認しながら、より良い放送を心がけており、例えば私の場合ですと、ゲーム実況中にアナウンサーから「元全日本監督としての河内さんならこの場面で現場サイドに立った場合には、どのような指示を出しますか？」などの質問を受けてそれに答える、というやり取りを交わしながら解説を進めていきます。それでもインターナショナルルールとNBAルールとは違うので、しばしば間違った解説をしてしまうこともあります。また実際の試合と放送時間がずれる場合、今は情報化社会でもあり、当日のゲーム結果は、インターネットなどで調べればすぐ分かりますが、私は結果を確認せずに解説に臨むようにしています。それは私自身もNBAファンであり、ゲームを楽しみにしており、今起きているプレーに対して、テレビをご覧になっている方と同じ気持ちで、見たままの状況を直感で解説するように心がけているからです。

解説をしていて一番苦労するのは選手のトレードによる移籍が多いことで、最近では日本のプロ野球やJリーグでも、チームのエース級の選手が移籍することがありますが、NBAの場合はトレードが頻繁に行われ、プレイヤーの登録名簿（ロースター）を覚えるのが大変です。トレードが成立しますと、チームのエースなどが突然いなくなることもありますから必然的にチームスタイルも変ることになり、ヘッドコーチの考え方などを勉強し、自分なりに解釈したりして解説しております。さらに日本でも名字が非常に多い鈴木、佐藤、田中、小林姓などの例がありますように、NBAでもウィリアムス、ジャクソン、ミラーなど名前が同じプレイヤーが数多くいて、ゲームによって両チームで同じ名前の選手が対戦するような場合には混乱して戸惑うこともあります。

私は解説をするにあたり、NBAファンとくに小・中・高校生のバスケット選手達に対して夢を与えたいため、日本人の体格と同じくらいの選手がいれば、巧みなボール回しでゴールシーンを演出するポイントガードを意識的に取り上げて、よく褒めた解説をするようにしています。その典型がジョン・ストックトン（ユタ・ジャズ）であり、今売り出し中のジェイソン・ウィリアムス（サクラメント・キングス～メンフィス・グリズリー移籍）であります。彼らを紹介することにより、今テレビを見ているバスケット少年達に、一生懸命がんばれば、彼らと同じプレイヤーになれる可能性があるということをテレビ解説を通じて訴えていきたいと思っているからです。身体が小さいことへの判官びいきでなく、他のアメリカンフットボールのクォーターバックにも似た、知的なイメージもあるこれらの選手たちが、大型の選手をテクニックで翻弄する姿は、本当に見ていて楽しいものだからです。

さらに最近では、ポイントガードのイメージを一変させてしまったのがアレン・アイバーソン（フィラデルフィア・76サーズ）であり、ステファン・マブリー（ニュージャージー・ネッツ）、スティーブ・フランシス（ヒューストン・ロケッツ）などテクニックよりもスピード、理屈よりも感性タイプが台頭してきて、ポイントガードでありながら自ら積極的

に得点を重ねていく選手が出現し、彼らのプレーを見ていると楽しさよりも新たな驚きの方が大きくなってきました。

来シーズンからは私自身にとって、日本のバスケット少年たちにジョン・ストックトン、ジェyson・ウィリアムスらはもとより、驚異的なプレイヤーたちをどのように表現して伝えて行けばよいのか、大きな課題でもあります。

NBAの解説をしていて私のバスケットの勉強に多いに役立っていることもあります。特に今シーズンは、世界の国々からアメリカにきているNBAプレイヤーが大活躍したシーズンでもありました。例えば、ドイツ出身のダーク・ノビッキー（ダラス・マーベリックス）選手がそうで、今までは米国の大学でプレーした留学選手がほとんどでしたが、ノビッキーの成功で、今後は欧州のプロリーグからの移籍組が増えてくると思います。現在欧州西側ゾーンからのNBA選手は7名ですが、旧ユーゴスラビア代表選手では今年最も成長したプレドラグ・ストヤコヴィッチ（サクラメント・キングス）選手がいます。アルビダス・サボニス（ポートランド・トレイルブレイザーズ）、トニイ・クーコッチ（アトランタ・フォークス）を代表とする多くの大型選手の中にも、シュートレンジの広い技能派の選手が多く、スモールフォワードをこなすストヤコヴィッチは新世代のホープと言えます。

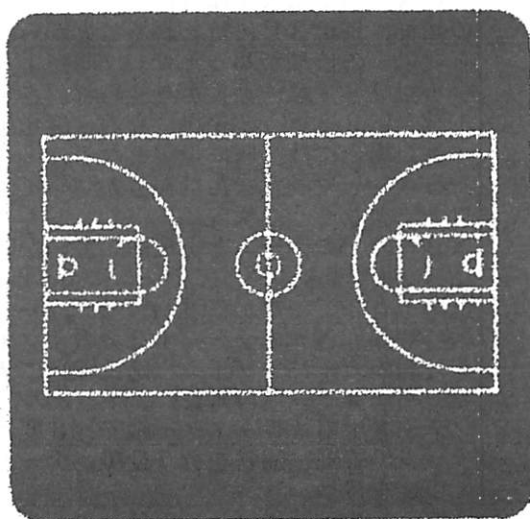
また、アフリカゾーンではディケンベ・ムトンボ（フィラデルフィア・76サーズ）、ハキーム・オラジュワン（ヒューストン・ロケッツ）など、腕の長さや体の柔らかさなど米国出身の選手にない抜群の身体能力があります。

中南米ゾーンではチム・ダンカン（サンアントニオ・スパーズ）を筆頭に、11名がNBAに所属して活躍しています。アジアゾーンからは初めてワン・ジージー（中国出身、ダラス・マーベリックス）が一員となり注目され話題となりました。

このようにNBAは世界最高のリーグでありますから、米国出身以外の選手の活躍を見ますと、おのずと世界のバスケットスタイルが見えてきます。全日本代表が世界に通じるためには、今、何をすべきかなど、参考になることが大変多いと思っています。

私は、日本のバスケット界発展のために、NBA解説を通じて多少なりとも、何か協力できるようながんばりたいと思っています。

[新潟アルビレックス・ゼネラルマネージャー]



八詩 (はちうた)

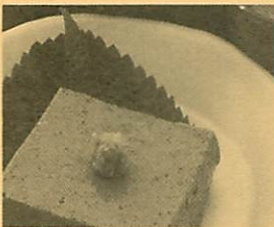
BISTRO 八詩

渋谷の喧騒を忘れそうな和める空間で、旬の素材を。

ごまや

BISTRO ごまや

渋谷の真ん中と思えない、まるで大人の隠れ家。



おすすめメニュー

ごまや特製 手造り胡麻豆腐
大正海老のふくら揚げ
クラッシュナッツとオレンジソース
チャイニーズチキンサラダ
ニューヨークスタイル
胡麻の葉御飯



東京都渋谷区道玄坂2-25-13
松原ビルB1F
tel:03-3770-8158
Open 17:00 ~ Last Order 23:00
年中無休 <85席>

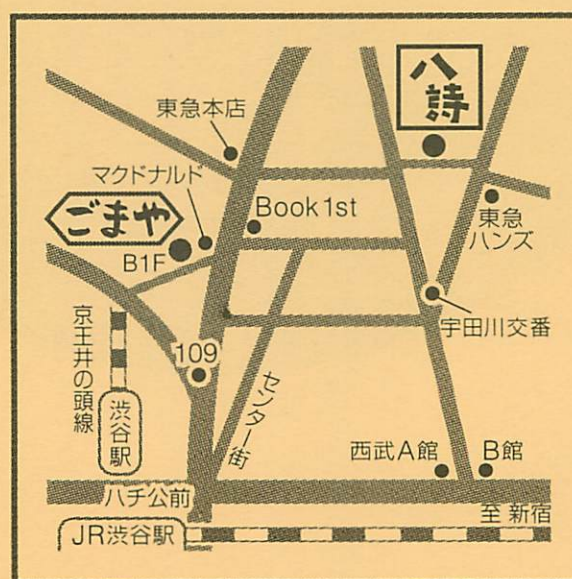


おすすめメニュー

肉豆腐 ネギどっさり
鮮! 生野菜盛り味噌で
有機印 キャベツどっさり炒め
緑豆でざる豆腐
お刺身いろいろてんこもりサラダ



東京都渋谷区宇田川町38-3
tel:03-3496-8009
Open 17:00 ~ Last Order 23:00
年中無休 <70席(2F50席・貸切OK)>



【オフィス】JACKPOT PLANNING ジャックポットプランニング

〒155-0032 東京都世田谷区代沢5-35-8 岩瀬ビル1F
TEL 03-3413-9555 / FAX 03-3412-7332

唯一の公式試合球



国際バスケットボール連盟
主催国際大会



アジアバスケットボール連盟
主催大会

JBL

バスケットボール
日本リーグ機構主催大会



バスケットボール女子
日本リーグ機構主催大会



MTB7WW JB2020

国際バスケットボール連盟公認球
日本バスケットボール協会検定球
○貼り○天然皮革○7号球○ワイドチャネル



ISO9001認証取得

闘う者に、ベスト・エキップメント。

molten

株式会社 **モルテン**

東京本社 〒130-0003 東京都墨田区横川5丁目5-7
大阪・名古屋・広島・福岡・四国・仙台・札幌・リノUSA・デュッセルドルフG